

館山支部だより Vol.105

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



真夏を彩るアメリカ芙蓉
<7月中旬 杜宅の庭先にて>

昨年1月来、一進一退を繰り返してきた新型コロナの感染状況が、今年に入りデルタ株への変異によりその猛威が警告されていたところですが、再々に及ぶ緊急事態宣言にも関わらず今週ついに過去最多の感染者の発生が報ぜられ、医療のひっ迫と相まってまさに由々しき事態と言えましよう。一方では、いろいろと取沙汰されていたオリンピックが前例のない無観客開催となったのも、諸般の情勢を考慮した苦渋の決断と言えるのかもしれませんが。コロナ禍の早期収束とともに国威をかけたオリパラが無事成功裡に終ることを祈りたいものです。
<川村 記>

支部の活動概要

《6・7月活動実績》

- 7.21(水) 県隊友会前期支部長等会議(千葉)
- 7.26(月) 防災研修 (館山市役所)
- 7.31(土) 7月支部役員会(コミセン)

《8・9月活動予定》

- 9月下旬 館山航空基地開隊68周年記念行事
(現在、まだ確定的な情報を得ておりません。)
- 9.25(土) 9月支部役員会(コミセン)

危機管理監に「防災施策」を聴く 7/26(月) 館山市役所

この4月の組織改編により館山市危機管理部危機管理課長に就任された清野賢一危機管理監を訪ね、折しも大型台風8号の接近を目前に控えて、情報収集や災害対応等の準備で課員があわただしく動き回る中、館山市の防災施策等について話を聞かせていただきました。清野氏が着任した一昨年は、房総半島台風と言われた台風15号を筆頭に、相次いで発生した東日本台風(19号)、豪雨災害(台風21号)等、一連の超大型台風により房総一帯が未曾有とも言われる甚大な被害を被った時期でした。当時の渡辺浩一郎危機管理監のもとで危機管理室の一員として災害対応に奔走された貴重な経験とともに災害対応の検証、改善の取り組み等について要旨を右欄にまとめましたのでご参照ください。
<川村 記>



<新設された「危機管理部」前にて
清野危機管理課長>

<記事> 清野賢一氏(航学35期)は、ヘリコプター操縦士として各地の部隊勤務を経験し、後段は空団司令部、護衛艦「いせ」飛行科勤務を経て鹿屋航空基地隊勤務を最後に海上自衛隊を定年退官(令和元年5月)、館山市役所危機管理室員として勤務。なお、居住地(南房総市富浦町)の関係で千葉県隊友会安房支部に所属しております。

館山支部 告知・案内コーナー

☆災害復興支援ボランティア要員の募集

平成23年の東日本大震災を機に千葉県隊友会が立ち上げた災害復興支援ボランティアチームは、東日本大震災(旭市を含む)では8グループ延べ112名、常総地方豪雨災害では延べ75名を派遣して復興支援作業に従事し、関係方面から統制のとれた組織的な活動ぶりを高く評価されております。現在、基幹要員として50名余の県会員が登録されていますが、要員の高齢化もあり、いざという場合(勿論こういう事態が生起しないことが望ましいのですが)に即応できるよう、1名でも多くの若い要員の交代・補充が求められています。登録要員として応募の意志ある方は支部事務局あて連絡してください。

☆支部機関紙「館山支部だより」への投稿依頼

支部と会員を結ぶ意思疎通の手段として平成16年以来、隔月発行を続けております「館山支部だより」も曲がりなりにも今月で通算105号を数えるにいたりました。一方的な事務連絡に終始することなく、会員の皆さんの声や要望、苦情等々、コミュニケーション紙として一人でも多くの皆さんが読んでいただけるよう、編集担当者として乏しい智慧を振り絞っておりますので、記事の投稿について一層のご協力をお願いします。

<館山支部事務局>

ヒアリング 要旨：「100年に一度の災害に備える」ことこそ防災の基本

開口一番、危機管理監の口から出た「(令和元年の房総半島台風15号による甚大な被害は) 100年前の関東大震災以来の出来事」というコメントが大変印象的であり、まったく同感でした。それは単に偶然の所産ではなく、房総半島の地理的・地形的な特色に加えて房総半島形成の長い地層学的？な歴史等々の条件が加担した、館山は「地震が少ない」、「津波が起こりにくい」、「大規模な土砂災害や河川氾濫の怖れがない」といった迷信？、自然災害に対する安心感といったものが人々の間に根強く浸透し、これが「災害に備え被害を防ぐ」ための「防災意識」を低下させ、しかも住民・市民に限らず自治体、官公署等を含めた「官民をあげた」傾向と考えるべきでしょう。阪神大震災の例を挙げるまでもなく、「100年に一度しか発生しない」という保証は決してないのです。一昨年の大災害を貴重な教訓として、これを防災に生かし、「いつ起こるか分からない大災害に備えること」、これが防災の基本と考えるべきでしょう。(一部、筆者の私見・私感的なものを含みます。)

「災害対応の検証」と改善への取り組み

令和元年の房総半島台風15号(9. 9)はじめ一連の超大型台風(19号、21号)によって未曾有とも言われる甚大な被害を被った館山市として、これを教訓として「災害対応の検証」を行なっております。避難所の開設・運営、支援物資の配布、情報収集・伝達からライフラインの復旧、防犯対策等々、広範多岐にわたっておりますが、「急ぐべきもの」、「できること」等は「即実行に移す」あるいは「暫定措置を講じる」ことで処理されております。検証作業の中間結果については、「だん暖たてやま、令和3年4月号」に別冊「災害対応検証号」として公表されておりますので、一度は目を通して置いたほうがよいでしょう。◇今年度から、市役所の「総合政策部安全課危機管理室」の危機管理部門を「危機管理課」に独立・昇格させ、自衛隊防災経験者2名体制とし、さらに課内の分担を防災係、消防係、復興支援係にすることで業務管理の細分・専門化を図っているのも、一昨年の台風災害の反省に基づく対応に他ならないのです。◇今週28日(水)の房日紙第一面の「国土強靱化計画(素案)」の記事は、国・県の国土強靱化基本計画・地域計画を踏まえ、館山市として大規模な自然災害に備えて、生活機能不全に陥らず迅速な復旧・復興ができる「強靱な地域」を造るため、素案をもとに市民からの意見を募るパブリックコメントを実施するもので、一昨年の甚大な台風災害が引き金となった、検証作業の一環として進められているものです。

「共助・自助」について一言

検証作業では、「自分の町は自分で守る」、「自分の身は自分で守る」、いわゆる「共助」・「自助」について、地域・自主防災組織、防災士等との連携不足や家庭・個人としての災害知識、対応面での問題点等も取り上げられておりますが、紙面スペースの関係で割愛することになります。要は「共助・自助」こそ「防災の要」と言っても過言ではないのです。 <インタビュー 川村 巖>

プラタモリが語る「館山航空基地建設秘史？」

5月に放映されたNHK番組のプラタモリ「房総レポートはどのようにしてできた」で館山が舞台になった。番組のガイド(解説者)を務めたのは、かつて東日本大地震の発生を予測した著名な地震学者で、100万年以上前から600年周期で繰り返されたという巨大地震によって現在の房総半島が形成され、波佐間海岸の露頭(露出した地層)にそのプロセスを見ることができると、素人分かりのする興味深い話であった。番組の最後には「案の定」館山航空基地(飛行場)が登場した。解説者いわく「館山には平坦な広い場所がないため、飛行場建設地の選定に大層難儀した」という。そして関東大地震で海底が隆起し、鷹の島と陸続きになった場所を埋め立てれば、「大幅な工期の短縮と経費の節減ができる」ということで大鼓判が捺され建設に至ったとか。いかにももっともらしい話であるが、史実とは大きくかけ離れているので建設の経緯等について雑学を披露することにする。

海軍航空基地(飛行場)建設に欠かせぬステップ

飛行場の建設は、膨大な予算を必要とする国家的な事業であり、当然のことながら国会の審議・承認を経ているはずである。その経緯を調べてみると、大正8年(1919)の第41帝国議会(現在の国会)で海軍5個航空隊(佐世保、霞ヶ浦、大村、館山、呉)の建設計画が承認され(国立公文書館資料)、大正11年までに佐世保、霞ヶ浦、大村の3航空隊が開隊している。ところが、館山航空隊の番になって建設計画が頓挫し、館山航空隊が開隊したのは8年後の昭和5年のことだった。館山が遅れた理由は次項に譲るとして、飛行場の建設について述べることにする。飛行場の建設候補地の選定に当たっては、気象要件や周辺の障害物、交通アクセス、糧食・生鮮食料品の確保、医療、子弟の教育等々、もろもろの要件を調査・検討の結果「建設計画」として要求が出されるのは現在と変わらない。当然のことながら、予算(施設)要求の時点で建設場所も決まっているのであり、計画が承認されてから「どこに建設するの？」という話にはならないのである。

「帝都防衛の重責を担う」はずの館山航空隊がなぜ遅れたのだろうか？

順番から言って館山航空基地は大正12年には着工の予定であったが、遅延の理由を記した公的な記録は見当たらないが、大正11年(1922)の「ワシントン海軍軍備制限条約の締結」をあげることができよう。これは主力艦の保有隻数制限という日本にとっては屈辱的な出来事であり、以後の海軍軍備を大きく変えるような大事件であった。建造中の大型艦は船台から降ろされてスクラップと化し、多数の就役艦が訓練標的として沈められた。また海軍工廠や造船所の工具・技術者が大量に解雇され、造船業界は大不況に陥り、ひいては日本経済の大恐慌を招くに至った。世に軍縮ムードが漂った時代である。飛行場の新設どころの話ではなかったであろう。

さらにこれに追い討ちをかけたのが、その翌年の9月1日に発生した関東大地震であった。横須賀軍港や横須賀航空隊施設等は甚大な被害を被り、復旧に十数年を要している。これ以上の説明は要しないであろう。結論的には「隆起した海岸を利用したのではなく、飛行場建設予定地が大地震で隆起しなくなった」と言うべきであろう。房総半島の形成過程の中に館山基地(海底の隆起)を取り上げ、地震・地層の世界と歴史を一緒にして、いたずらに視聴者の興味を煽ろうとする番組企画者の、史実の探索が欠如した、幼稚な子供だましの企画としか言いようがないのは残念である。

<<自称地域史探索マニア その30>>

